

さらに、小学校と中学校の施設を同一敷地内に設置し、9年間の義務教育を一貫して行う施設一体型小中一貫校では、これらの教育的効果が最大限に発揮されることが期待でき、登下校や休み時間での子どもたち同士のふれあいなどにも教育的意義があると考えています。多くの施設一体型の先進校では、このような学校生活を通して、**中学生が優しくなった**と聞きます。そして、職員室が一つになることで、教職員同士の情報共有が円滑に図られ、つながりのある学習指導や児童生徒の実態に即した見守りや支援が可能になったとも聞きます。

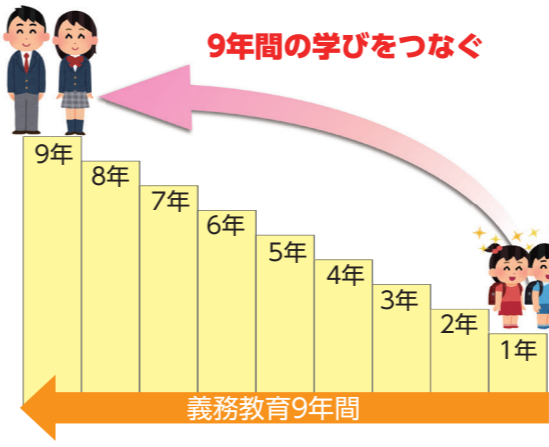


三木市のめざす小中一貫教育

問(市)小中一貫教育推進室

関連するSDGs目標
4 質の高い教育をみんなに

三木市の学校では、これからの変化の激しい時代を生き抜くために必要な「主体性」「協働性」「創造力」を身に付けた子どもを育成するため、同じ中学校区内の小・中学校の教職員が「めざす15歳の姿」を共有し、その実現に向けて取り組んでいます。これまでの仕組みでは、小学校6年間、中学校3年間という枠組みで学ぶことが当たり前とされてきましたが、小中一貫教育では連続した9年間を一体的にとらえ、1年1年の学びを確実に積み上げながら、子どもたちの成長を途切れさせることなく、一人一人を支え導くための、つながりのある教育を推進しています。



小中一貫教育推進に向けた市の取組状況

●実践推進校の取組
別所小・中学校、吉川小・中学校では次のような取組を進めています。
・9年間を見通したカリキュラムをつくりつながらのある指導をめざした小・中学校教員による相互授業参観・合同研修会
・児童生徒の交流活動(学校行事や授業など)



交流活動での「読み聞かせ」

●市内全学校の取組

各中学校区で小・中学校教員が教科ごとに、児童生徒の学習状況の把握と課題の共有を行い、「学習内容のつながり」や「効率的な指導方法」について意見交換をし、これからの指導に役立てる研修を始めています。

専門家に小中一貫教育の特徴を聞きました

中一ギャップの解消

小学校と中学校では授業時間や学習内容、指導方法などが異なり、中学校進学時に学習への戸惑い、不登校やいじめの増加などの問題、いわゆる中一ギャップ(小中ギャップ)があります。小中一貫教育では、児童生徒の積極的な交流や、教員同士の情報共有の強化によって、これらの課題解消をめざしていきます。



兵庫教育大学大学院 准教授 安藤福光さん

学校でどのような内容を学び、それが中学校でどのように発展していくのかを把握できるため、つながりのある指導が生まれ、授業のわかりやすさ、児童生徒の学ぶ意欲向上にもつながることが期待されます。

さらに、参観するだけでなく、小・中学校の教員が互いの授業に関わる研修も行っています。これは全国的にも珍しく、このような機会があることが、教員のさらなる意識改革にもつながっています。

幅広い年齢層とふれ合う効果

下級生が上級生(中学生)みたくになりたいという憧れの気持ちを抱くと同時に、上級生も下級生の手本になりたいという責任感や自覚を持って育ちます。幅広い年齢層の人間関係の中で、多様性にふれ、協働する資質や社会性を育成することもできます。

小・中合同授業を実施

吉川小学校6年生が総合的な学習の時間に、吉川中学校へ行き、合同授業を行いました。小学生在が中学校進学に向けて不安に思っていることを質問し、中学1年生が答える形で授業を進めました。中学生は、先輩として中学校生活の様子を伝え、小学生は、先輩や中学校の先生、施設の雰囲気を感じることができました。最後には、小・中学校混合チームでドッジボールをするなど、仲良く活動ができました。児童からは「中学校のこと(勉強、部活動、校則、学校行事、先生など)をイメージすることができて、中学校に進学するのが楽しみになった」という声なども聞かれました。



吉川小学校 小中一貫教育担当 八木先生

施設一体型小中一貫校の吉川地域への設置が決定

昨年度の三木市小中一貫教育推進協議会での検討や今年5月の総合教育会議を通して、吉川地域に施設一体型小中一貫校を設置することが決定しました。現在、5〜7年後の開校をめざして準備を進めています。

小・中学校の連携・協力により、学習や体験を計画的に積み上げていくことができる小中一貫教育の中でも、施設一体型小中一貫校は子どもにつけたい力をより効果的に育む教育環境であると考えています。市教育委員会では、引き続き未来を生きる子どもたちにとって、よりよい教育環境の実現をめざして、取組を進めていきます。



詳しくはこちら



吉川地域における施設一体型小中一貫校設置に係る地域協議会の様子